東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

ライヒャルトのリート研究：その３ー「クセーニエン論争」を巡ってー

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 千尋, Murata, Chihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1473

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ライヒャルトのリート研究：その3
―「クセーニエン論争」を巡って―

村　田　千　尋

東京音楽大学研究紀要　第46集　－2022－

ライヒャルトのリート研究：その3
―「クセーニエン論争」を巡って―

村 田 千 尋

序　－問題提起－

ヨハン・フリードリヒ・ライヒャルトJohann Friedrich Reichardt（1752-1814）は1790年代前半において、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテJohann Wolfgang von Goethe（1749-1832）が最も信頼する「第一作曲家」であったが、ゲーテとその盟友フリードリヒ・フォン・シラーFriedrich von Schiller（1759-1805）が引き起こした「クセーニエン論争Xenienstreit, Xenienkampf, Xenienkrieg」に巻き込まれ、その関係にひびが入ることになる。

「クセーニエン論争」とはゲーテとシラーが『詩神年鑑1797　Musen-Almanach 1797』に掲載した風刺的2行詩「クセーニエンXenie（n）[1]」に端を発する文学論争であり、ゲーテとシラーは後に以下のように回想している。

> ［ゲーテ］「『クセーニエン』は無邪気で他愛のないところから始まり、辛辣で鋭いものへと徐々に上昇し、何ヶ月もの間私たちを楽しませてくれた。そして『詩神年鑑』が出版されると、その年のドイツ文学界で最大の動きと衝撃を与えた。そしてそれは表現の自由に対する最大の濫用として読者から非難された。(Goethe 1830: 48)」
>
> ［シラー］「あっちに行ったりこっちに来たりした末に、全てのものがようやく収まりました。『クセーニエン』の最初のアイデアは、元々はいたずらだったのですが…　その後、どんどん拡大し、ついには容器を破裂させるに到りました。しかし今、この出来事についてもう一度考えてみると、あなた［ゲーテ］の願いと『詩神年鑑』に適合させることを同時に満たす、世界からの自然な逃げ道を発見したということです。これらを準備中の『詩神年鑑』次号［97年版］に置いて、他の詩の中で面白い詩に『クセーニエン』という名前を付け、昨年のエピグラムのようにひとまとまりとして、最初の部分に続くように設定すれば良いでしょう。(⑲[2]1. August 1796, Schiller an Goethe)」

この論争はドイツ文芸史上の重要な出来事として19世紀半ばから研究対象であり[3]、20世

1) Xenie(n)とは「元来は古代ギリシアで招かれた客が家の主人とかわす贈り物、特に献詩（国松1998: 2727）」であり、マンフレッド・ベーツManfred Beetz（1941-2021）はゲーテ、シラーによる文壇風刺に対して「客人からの毒のある贈り物Vergiftete Gastgeschenke（Beetz 2003: 83）」という言葉を用いている。
2) 以下〇数字によって引用・言及した各書簡を示す。この番号は年表、参考文献表にも記載している。
3) エドゥアルト・ボアスEduard Boas（1815-53）は「クセーニエン」の経緯を説明すると同時に内容を分析し、さらに反論も掲載している（Boas 1851）。また、エルンスト・ユリウス・ザウペErnst Julius Saupe (1809-71)も「クセーニエン」の内容分析を行っている（Saupe 1852）。

紀末からはライヒャルト研究の中で再び注目されている[4)]。

ライヒャルト研究の枠内では、「クセーニエン論争」はゲーテが匿名で発表した『ドイツ難民の会話集Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten』（以下『会話集』）に対して、ライヒャルトが自分の編集する雑誌『ドイツDeutschland』において非難したため、ゲーテとシラーがシラーの主宰する雑誌『詩神年鑑1797』に風刺的２行詩「クセーニエン」を掲載してライヒャルトを攻撃したと説明されてきた[5)]。しかし、論争の経緯やその影響についてライヒャルトの活動に対する障害として論じられても、彼がその間に行った音楽活動には目が向けられておらず、論争の影響についての論議が偏っている。また、周辺状況についても議論が不足していると思われるので、この論争の経緯や影響を見直すことによって、論争がライヒャルトの音楽活動に与えた影響を改めて検討したい。その際、この論争に関わる出版物と、同時期に交わされたゲーテ・シラーの往復書簡、あるいはライヒャルトを含む関係者の書簡が重要な資料であり、これらを読み解くことによって論争を改めて検討し、その意義について考えたいと思う。

Ⅰ　論争以前

１．ゲーテ、シラーとの関係

ライヒャルトによるゲーテ歌曲の創作（表２参照）は1780年に始まり、ゲーテは創作活動初期から重要な詩人であったと位置づけられる。彼はリート（歌曲）のみならず、ジングシュピールの創作、全６巻の《ゲーテ音楽作品集Musik zu Goethe's Werken》の企画（1791年）、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代Wilhelm Meisters Lehrjahre』（以下『修業時代』）への付録楽譜提供（1795年）など、「ゲーテの第一作曲家」としての地位を確立していた。

一方、シラー歌曲の創作（表３参照）は遅れて1795年に、『詩神年鑑1796』への楽譜提供を依頼されることで開始した。すぐさま「第一作曲家」となったということを意味している。

２．ゲーテ、シラーの不信

ところが1792年から93年にかけてフランス旅行を決行したライヒャルトは、フランス革命に共鳴するような発言を繰り返し、1794/96年には『めざとい旅人の音楽に関わる書簡Briefe eines aufmerksamen Reisenden die Musik betreffend』（Reichardt 1794/96）を出版している。その結果、プロイセン宮廷の覚えも危ういものとなり、ハレ近郊のギービヒェンシュタイン

---

4) ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウDietrich Fischer-Dieskau（1925-2012）（Fischer-Dieskau 1992）、ライナー・グストラインRainer Gstrein（1956-）（Gstrein 1992）、クリストフ・ミヒェルChristoph Michel（?-?）（Michel 2002）、ワルター・ザルメンWalter Salmen（1926-2013）（Salmen 2002）、ベーツ（Beetz 2003）、ボードー・プラハタBodo Plachta（1956-）（Plachta 2003）等がいる。しかし日本における先行研究は少なく、滝藤早苗（生年不詳）が僅かに紹介している程度である（滝藤2017）。

5) たとえば滝藤は「シラーの『ホーレン』に匿名で掲載された『ドイツ避難民閑談集』を、ゲーテの書いたものと知らずに批判したことが発端となっていわゆる『クセーニエン論争』が始まった」としている（滝藤2017: 47）。

に隠棲している間にプロイセン宮廷楽長を解雇される（1794年10月28日）。それにも拘わらず、彼は1795年に『フランスFrankreich』、翌96年に『ドイツ』[6]という２種の政治的色彩の強い雑誌を出版した。この政治的な姿勢が、ゲーテ、シラーの不信を招いてしまったようだ。

シラーは『詩神年鑑1796』に掲載する楽譜について打ち合わせる1795年８月３日付けの手紙で不満を直接表明している。

「私は最初、芸術家（世界の中で唯一完全に自由な存在）が新しい世界史のこの重苦しい政治的動勢に関わっているのを見て、ほとんどうんざりしていた。しかし、あなたの雑誌［『フランス』］が材料の豊富さとその興味深い選択によって明らかに際立っているということは、この種の執筆があなたの仕事にふさわしいということを示している。それでも、親愛なる友よ、私にこの分野での判断や助言を求めないでください。私はこの分野に非常に疎く、文字通り、私はこの世紀に生きていないのですから。フランスで革命が起こったと聞いたことはありますが、私が知っている最も重要なことはこの程度です。(④3. August 1795, Schiller an Reichardt)」

ゲーテとの軋轢は、彼が1830年になってから書き綴った回想録『日々と年々の覚えTag- und Jahreshefte』（以下『覚え』）に鮮明に記されている。

「ウンガーが続編の出版を急ぎ、まさに［『修業時代』］第２巻が準備されている最中に楽長ライヒャルトとの関係が拙くなりました…［中略］…彼は音楽を通して私の叙情詩に対して真剣に、いつも一般に宣伝した最初の人です。…［中略］…今、ライヒャルトは怒りに駆られて革命に身を投じました。…［中略］…しかし、私は、このような暴力的に崩壊した状況の恐ろしい容赦のない結果を目で見ていたので、同時に祖国における同様の隠された動きをすっかり見てきたので、現状に固執しました。その改善、覚醒、意味への方向性、そして理解のために意識的にも無意識的にも私は生涯ずっと働いており、この態度を隠すことができませんでしたし、隠したくありませんでした。…［中略］…幸いにもライヒャルトは『ヴィルヘルム・マイスター』に作曲し始めていました…［中略］…彼の曲の中でも〈あの国を知っていますかKennst du das Land〉は高く賞賛されています。…［中略］…彼は政治的には敵であっても音楽的には私たちの友人であったので、ウンガーは彼に続巻の詩を提供し、続巻の準備は滞りなく進むことになりました。(Goethe 1830: 36f.)」

ゲーテの『覚え』に基づくと『修業時代』第２巻の準備中に問題が発生したことになる。『修業時代』第１部と第２部は1795年前半に出版され、その中に含まれる挿入歌５編についてライヒャルトによる付録楽譜５曲が掲載されている。これは、ここで必要と思われる歌詞の全てであり、第２部はその準備中に問題が発生しても、既に楽譜の印刷が終わっていたため全曲掲載され

6) Hathi Trust Digital library (https://catalog.hathitrust.org/)によって何種類かの画像データを見ることができるが、ハーヴァード大学本、カリフォルニア大学本、ミシガン大学本は挿入楽譜の頁が折りたたまれているために読めず、唯一全ページを見ることができるオハイオ大学本は第１巻、第４巻を欠いているため、完全な画像データは存在しない。

たと思われる。1795年12月５日と21日に『修業時代』付録楽譜の支払いに関わる手紙が残っているが、それを見る限りでは二人の不仲は読み取れない。

ところが、同じく1795年ではあっても後半になってから出版された『修業時代』第３部では、３曲中２曲のみ楽譜が掲載され、竪琴弾きの〈戸口にたたずんでAn die Türen〉には楽譜が載せられていない(作曲された形跡もない)。さらに『修業時代』第４部でも唯一の対象曲〈ミニョンの最後の歌Mignons Letzter Gesang〉に楽譜はなく、『修業時代』への付録楽譜掲載に支障が生じたことは明らかである。この点は、ゲーテの「続巻の準備は滞りなく進む」という発言と矛盾している。

残念ながら掲載中断の連絡がどの様に伝えられたかは不明であるが、両者にとって不愉快であったことは確かだろう。いずれにせよ、いわゆる「クセーニエン論争」の前にゲーテ、シラーと気まずい仲になっていたということがわかる。

Ⅱ　論争の経緯

1．ゲーテ『ドイツ難民の会話集』

ゲーテは『会話集』をシラーが主宰する文芸雑誌『ホーラたちDie Horen』[7)]1795年号に発表しようとした。『ホーラたち』に政治的な意見を載せないことを旨としていたシラーは[8)]、『会話集』掲載に躊躇したようで、「私は読者に対して［雑誌『ホーラたち』は］政治的判断には踏み込まないと公言しているので、この会話の中で語られていることが、読者の賛同を得るものか、少なくとも多数の人々に不快の念を催すものではないかどうかを検討するようにお願いします。(① 29.November 1794 Schiller an Goethe)」と伝えている。

結局、『会話集』は匿名で『ホーラたち』に掲載されることになるわけだが、シラーの趣旨に反することは確かで(松村2003: 84)、シラーが巻頭の辞の末尾に「望むなら匿名が許される(Schiller 1795a: ix)」と記し、匿名の可能性を示唆しているのも、このような件を想定してのことと考えられる。

発表された『会話集』の内容は以下の通りである。

1．発端　フランスとの戦争　ライン左岸からの避難　貴族の意見を代弁(第1年巻第1号)
2．－5．4つの物語(第1年巻第2号、第2年巻第4号、第3年巻第7号、同第9号)
6．寓話Mährchen(以下『寓話』)(第4年巻第10号)

---

7)『ホーラたち』はギリシア神話で季節と秩序を司る３柱の女神エウノミアー　Eunomia、ディケーDike、エイレーネーEireneの名に因んで名付けられ、1795年から97年までの３年間に全36号が発行されている。「ビーレフェルト大学デジタル文庫Bielefeld-Digitale Sammlungen」http://ds.ub.uni-bielefeld.de/に画像データが、「ゲーテ・シラー・アルヒーフFriedrich-Schiller-Archiv」https://www.friedrich-schiller-archiv.de/にテクストの書き起こしデータが掲載されている。ただし、ビーレフェルト本は第３年巻の第９号、第11号、第12号(同文庫の数え方では11巻９号、12巻11号、12巻12号)が欠落している。

8)シラーは1794年12月10日付の『ホーラたち』巻頭の辞において、「その日のお気に入りの話題について自分自身に厳しい沈黙を課し…［中略］…真実と美の旗の下で政治的に分断された世界を再統一する(Schiller 1795a: iii f.)」と記している。

２．雑誌『ドイツ』

これに対して、ライヒャルトがゲーテの著作と知らずに非難を浴びせる。『ドイツ』各巻にはドイツで出版された雑誌に対する書評が掲載され、第１巻第１号55頁[9]以降で『ホーラたち』が採り上げられている。彼は最初に『ホーラたち』の基本方針について「『ホーラたち』の編集者は日常的な話題（戦争、政治的意見、国家批判）に対して厳しい沈黙を守る。沈黙を守り、世界の現状と来たるべき世界への期待について述べることを禁止している。(Reichardt 1796b: 55f.)」と述べ、58頁以降でいよいよ『会話集１』への批評が始まる。

> 「３番目のエッセイ［『会話集』1］は現在の戦争のシーンとその結果を扱い、作者と登場人物が日常的な話題について判断や議論し足りないだけではなく、[編集者の]意図と登場人物の発言が全く分離して日常的な話題に明確な非難の判断を下している。…［中略］…著者は貴族の立場と誇りを代弁している…［中略］…『ホーラたち』の多くの部分を占めているこの『会話集』に我々が今後は関わらずに済ませられるように、この著者はドイツの読書界を低く見積もっていると言っておきたい。(Reichardt 1796b: 55-63)」

つまり、雑誌の基本姿勢に反し、貴族的な態度にも反感を感じると、全面否定をしている。その後、『会話集２～５』については何も述べていないのだが、『ドイツ』第10号になって、『会話集６』の『寓話』を採り上げ、今度は高く評価する。

> 「我々も、そして我々が知っている『ホーラたち』のあらゆる読者も、［最終話の］寓話では、詩人の果てしない想像力と豊かな機知に驚嘆する。…［中略］…物語が語られていく中で様々な種類の手本を設定しているように見える言語は、これらの文章の中で散文の最も高貴な表現に達しているようだ。(Reichardt 1796b: 377)」

実は、『修業時代』と『ドイツ』は出版社が同一で、いずれもベルリンのヨハン・フリードリヒ・ウンガーJohann Friedrich Unger[10]（1753-1804）が出版を引き受けている。そのためであろうか、『修業時代』第４部に、なんと『ドイツ』の広告が掲載されている。はたしてゲーテは気付いていたのだろうか。

３．文壇風刺詩集「クセーニエン」

ここで一旦時間を巻き戻し、「クセーニエン」の誕生について述べることにしよう。先にも述べたように、これはゲーテが思いついたいたずらから始まっているわけだが、誕生の経緯はゲーテとシラーの往復書簡[11]から読み取ることができる。以下、主要なものを示そう。

---

9) ベーツは第１巻第３号58頁以降としているが、第１号に掲載されている。

10) ライヒャルトはウンガーを信頼していた模様で、『ドイツ』の後継誌であり、フリードリヒ・フォン・シュレーゲルFriedrich von Schlegel（1772-1829）と共同編集をした『芸術の高等学校Lyceum der schönen Künste』の巻末に読者への呼びかけの文を載せ、彼の楽譜の取り次ぎ店としてライプツィヒのフリードリヒ・フライシャーFriedrich Fleischer（1758-1803）と共にウンガーの名前を挙げている（Reichardt 1797）。

11) ゲーテ とシラー1794年から1805年の間に全部で999通の書簡を交換しており、Goethe-Schiller-Archivのサイトで文字起こしされた電子データを見ることができる。中でも1795年から98年にかけて年間百通以上の手紙が交わされ、95年12月から97年２月の間に「クセーニエン」関連の手紙が約60通存在する。

［ゲーテ］「全ての雑誌にそれぞれが２行詩Disticho(n)でできたエピグラム［警告］、つまりマルティアルのクセーニエンを載せるという最近の思いつきを磨いていって、あなたの『詩神年鑑』来年号にひとまとまりを準備しなければなりません。沢山作り、その中から良いものを選ばなければなりません。（⑧23. Dezember 1795, Goethe an Schiller)」

［シラー］「『クセーニエン』のアイディアは素晴らしいので、実行しなければなりません。… 題名もとても良い思いつきですね。（⑨29. Dezember 1795, Schiller an Goethe)」

［ゲーテ］「あなたが『クセーニエン』を受け入れ、賛同して頂き嬉しく思います。更に広めなければならないということにまったく同感です。（⑩30. Dezember 1795, Goethe an Schiller)」

その後、二人で競いながら作り合う姿が往復書簡に現れている。当初は親しい人達への軽いいたずらであり、親しいが故に理解してもらえるはずであっが、だんだんと辛辣さを増し、度の過ぎたものへとなっていった様子もわかる。

「クセーニエン」の中で最も多くやり玉に挙がったのは出版業者で文筆家でもあったクリストフ・フリードリヒ・ニコライChristoph Friedrich Nikolai（1733-1811）であり、イマヌエル ・カントImmanuel Kant（1724-1804）やFr.シュレーゲルなど、当時の一流文化人を含むどころか、執筆者であるゲーテ、シラー自身も風刺の対象となっている[12)]。シラーは12月29日の手紙に標的とする人物の候補を挙げているが、そこにライヒャルトの名前はない。ライヒャルトを標的として「クセーニエン」が始められたのではないことに注意すべきである。

ところが、1796年１月に大きな転換点が訪れた。シラーからゲーテに宛てた１月27日の書簡には次のようにある。

「友人であるライヒャルトを『クセーニエン』で称えることを忘れないでください。ウンガーから出版した彼の雑誌『ドイツ』に載っている『ホーラたち』の書評をちょうど読んだところです。彼は『会話集』や他の文章についてひどく自分勝手なことを書いています。（⑪27. Januar 1796, Schiller an Goethe)」

ここでライヒャルトの『会話集』批判が話題となり、ライヒャルト攻撃が始まったのである。

---

12) いくつか例を示そう。ニコライ「184. ニコライ：ニコライはまだ旅をしている、更に長い間旅行するだろう、／しかし、彼は理性の国への道を見つけることはない。」（他に9, 10, 24, 46, 73, 84, 128, 142-144, 184-206, 218, 238, 254, 334, 355,（415-418）等）。カント「63. カントに：あなたは新しい預言者の口調を高貴と言うのか？そのとおり、／優雅に哲学することは、平民のように考えることを意味する。」（他に53, 63, 296, 379, 388, 389,（480-482, 485, 486, 488, 503-506, 559-574）等）。Fr.シュレーゲル「322. 警告：あなたは理性によってのみ、価値ある大義を提唱する。／私は祈ります！それが嘲笑や笑いにならないように！」（他に126, 278?, 302, 305-308, 310, 320-331, 342, 391, 39等）。
さらに、ゲーテ「355. 若きヴェルテル：『ここで何を待っているの？』－私は愚かな仲間を待っています、／それは私の苦しみを味気なく喜ぶ人です。」（他に103, 137, 183?, 249, 260, 263, 270, 283, 311, 355, 396?,（447, 456 457)等）、シラー「305. シラーの女性の尊厳：そもそも、曲が少しも読めないので、後ろから読んでみたら、／詩節につぐ詩節、そしてそれがとても素敵に見える方法です。」（他に138, 249, 260, 263, 299, 305, 306, 404, 406,等）。このように、自分自身も皮肉の対象とするのは、まさにドイツのイロニーである。もっとも、19世紀にも各風刺詩が誰を風刺対象としているかという複数の研究（たとえばボアス、ザウペ）があるが、それらの判断は必ずしも一致していない（Boas 1851; Saupe 1852）。

これに対してゲーテは「あなたからの手紙で、雑誌『ドイツ』と『フランス』を初めて［読みました］（⑫30. Januar 1796, Goethe an Schiller）」、「彼［ライヒャルト］は『会話集』に対しては厚かましくも貶していますが、同じ書評の他の箇所では頬を膨らませてあなたを賞賛しています。（⑬31. Januar 1796, Goethe an Schiller）」と返信している。

シラーは追い打ちを掛けるように「音楽家としての彼［ライヒャルト］も攻撃するべきです。その分野でも彼は正しくないのですから。彼は私たちの領域で戦いを仕掛けてきたのだから、彼の最後の拠点まで追い詰められるのは当然のことです。（⑮150. 5.Februar 1796, Schiller an Goethe）」と述べている。

2000年前後の「クセーニエン論争研究」はライヒャルト中心に展開されてきたため、「クセーニエン」の標的が主にライヒャルトであったかのように描かれている。ライヒャルト研究という枠の中では致し方ないことではあるが、「クセーニエン」の標的となった人物は様々であり、ライヒャルトはむしろ遅れて標的となったのである。滝藤によれば全925編中76編がライヒャルトに向けられているので（滝藤2017: 47）、幾つかの例を示そう。

「80. さそりの印：しかし今、G-b-n［ギービヒェンシュタイン］[13] から邪悪な虫がやってくる。／お世辞を言いながら近づいてくる、急いで逃げないと刺される。」

「211. 様々な調教：貴族の犬は乞食にうなり声を上げる、本当に／民主的なスピッツは絹のストッキングに向かってキャンキャン吠える。」

「222. 策略：雑誌は匿名でのみ書け。そうすればおまえが頬を／膨らませておまえの音楽を賞賛しても、誰もそれには気づかない。」

「251. 雑誌『ドイツ』：ドイツ人は厳粛さですべてを始めるので、この／雑誌『ドイツ』も楽士がラッパを吹いて始まる。」（他に50, 80, 145-147, 208-217, 219-229, 236, 251, (421) 等）

このように、あからさまな揶揄が含まれているものがあるとはしても、決してライヒャルトを標的として「クセーニエン論争」が始まったものではなく、その展開の中で主要な標的の一人としてライヒャルトの名が意識されたのである。

このような状況にありながらも、ライヒャルトは『ドイツ』(1796) のその後の巻でも『ホーラたち』の批評を続けていることを指摘しておこう[14]。

4．反響と争いの拡大

ゲーテとシラーが「クセーニエン」への反響を気にしている模様は、以下の手紙からわかる。

> 「彼［フンボルト］は私たちの年鑑に驚き、まさにそれに夢中になっています。『クセーニエン』はまた、私たちが望むように彼に陽気な印象を与えました。『クセーニエン』に

13) ギービヒェンシュタインGiebichensteinとは当時ライヒャルトが住んでいたハレ近郊の町である。彼はここで、岩塩鉱山の監督官を任されていた。

14) 『ドイツ』第１号で『ホーラたち』第１号の批評をしたのを皮切りに、『ドイツ』第７号で『ホーラたち』第２号から第５号まで、第８号で『ホーラたち』第６号、第10号で『ホーラたち』第７号、第12号で『ホーラたち』第８号の批評を展開している。しかし、それらは決して否定的な内容ではない。

ついて、それらはすべてあなたのせいにされていると彼は書いていますが、ベルリンでは、すべてを直接あなたに見せて貰って読んだと主張したフーフェラント［Christoph Wilhelm Hufeland（1762-1836）］によって、［その噂が］さらに強まっています。最近、『詩神年鑑』について他には何も聞いていません。（㉖23. Oktober 1796, Schiller an Goethe）」

この手紙より少し先のことと思われるが、『ドイツ』第６号348頁にFr.シュレーゲルが『詩神年鑑1796』を論評した「シラーの『詩神年鑑』について『ドイツ』の編集者へAn den Herausgeber Deutschlands, Schillers Musen Almanach betreffend」が掲載されている。

「シラーの詩は、非常に高く評価されている学術的作品をさえも哲学的内容について凌駕していることが稀ではなく、人々は彼の歴史的および哲学的試みにおいて、詩人の活力、巧みな言い回しだけでなく、深い思想家の洞察力、人間の力と尊厳も賞賛する。…［中略］…彼に加えて、ゲーテもこの雑誌に大きく貢献している。今後の巻でも二人は協力し合って最も活気のある願いと最も楽しい希望を呼び起こすだろう。（Schlegel 1796: 359f.）」

このようにシュレーゲルは全体としては肯定的な評価している（個別の内容については鋭い指摘を含む）。ライヒャルトが論評しないので促したのであろうか。

ところがライヒャルトはここで火に油を注ぐような行動に出た。『ドイツ』第９号347頁に〈ミニョンの最後の歌〉の楽譜を掲載したのである。この曲は当然、『修業時代』のため用意した曲と考えられる。『修業時代』第４巻に掲載はされなかったが、既に作曲が終わり、準備されていたのだろう。

これに対してゲーテもカール・フリードリヒ・ツェルターKarl Friedrich Zelter（1758-1832）に〈ミニョンの最後の歌〉の作曲を依頼して1796年10月に出版されたシラーの『詩神年鑑1797』に掲載したため[15]、話がさらに拗れたものと思われる（ツェルターは〈天使の仮装をするミニョン〉と題している）。ゲーテとツェルターが何時、どの様にして知り合ったのかさだかではないが、彼は出版社のウンガーに宛てた書簡でツェルターに言及している。

「ツェルターの優れた作品は、彼の仕事を私に最初に教えてくれた或る会合で知ったものです。彼の旋律〈私はあなたを思うIch denke dein〉は私にとって信じられないほどの魅力を持っていました。そしてシラーの『詩神年鑑』のために自分で詩を書くということを抑えることができませんでした。（⑰13. Juni 1796, Goethe an Unger）」

そして1796年６月22日付けのシラー宛の書簡でツェルターの楽譜を『詩神年鑑97』に掲載するよう依頼している。

「ベルリンのツェルターは準備できています。今すぐ彼に手紙を書いてもらえたら良いと思います。あなたの『詩神年鑑』に掲載して欲しい〈ミニョンの歌〉があります。小説［『ヴィ

15）『詩神年鑑』には作曲者名としてZellerと書かれているが、Zelterの誤植と考えられる。ゲルトラウト・ヴィットマンGertraud Wittmann（1909-?）もツェルターの作品と考えている（Wittmann 1936: 33）。

ルヘルム・マイスターの修業時代』]の中では［楽譜は載せられずに］詩が掲載されているだけです。（⑱22. Juni 1796, Goethe an Schiller)」

その後、シラーは『詩神年鑑1797』及び同98年版への楽譜掲載の依頼相手をツェルターに変更し、二人はシラーの死の直前まで、多くの書簡を交わすこととなる。つまり、「ゲーテの第一作曲家」どころか「シラーの第一作曲家」の地位までツェルターに奪われることになり、こうして楽譜出版を戦場としたゲーテの追い打ちが始まるのである。

このような状況では、ライヒャルトとツェルターの関係も危ぶまれるが、ライヒャルトは彼が編集する《集う喜びの歌曲集Lieder geselliger Freude》シリーズ（1796-97年）に、『詩神年鑑1797』に掲載された〈訪問Der Besuch〉を始め、数多くのツェルター歌曲を掲載しており、彼等の関係にひびが入ったとは考えられない。

5．ライヒャルトの『ドイツ』における反撃と論争の終息

「クセーニエン」の攻撃に対してライヒャルトは『ドイツ』第４号に掲載した書評で『詩神年鑑1797』を採り上げ、87頁以降で以下のように批評している。

「28頁から31頁にあるゲーテの２行詩のいくつかでは、格言風の簡素さが何処か悪ふざけのような調子でもって陽気に活気づけられ、同時に詩に社交的なムードを広げ、愉快な会話の断片であるかのように見えます。…［中略］…どっちみちこの詩集のほとんど類例のない豊かさは、全てを分析することを許しません。…［中略］…この二行詩集でこれまでに触れてきた階段の一番上にクセーニエンは位置する。それは論評を許さない。（Reichardt 1796c: 87-99)」

ここでは賞賛しているようにも読めるが、103頁以降において「シラーの『詩神年鑑1797年版』に掲載された『クセーニエン』に関して、編集者から読者の皆さんへの説明Erklärung des Herausgebers an das Publikum, über die Xenien im Schillerschen Musenalmanach. 1797.」と題して昂然と反撃を開始する[16)]。

「クセーニエンの詩人は、最も悪質な中傷と無礼によって、『ホーラたち』と昨年のシラーの『詩神年鑑』に載せられた彼らの文章に対するこの雑誌の批評に復讐しようとしました。…［中略］…この雑誌と、やはり同じように悪意を持って扱われている『フランス』が誰にでも参照でき、公平な人なら誰でも、これらの判断が率直かつ正当であり、一方、これらの非難が最も不器用な中傷であるか、そうでないかを容易に判断できるであろうから、ここでこれらの中傷に反論する必要はないだろう。…［中略］…『詩神年鑑』の評者が引用した警告文の中で、シラー氏は侮辱された人々に対して、『もし彼らが返事をしたら、もっと厳しい懲罰を与える』とまで言って脅しているのだから、この理由だけでも、滑稽な自惚れに我を忘れた恥ずかしい行為を咎めないわけにはいかない。

16) ライヒャルト以外にも「クセーニエン」の標的となった人々は反撃を試みており、ボアスはそれを整理して掲載している（Boas 1851)。しかし、本稿ではそれらには立ち入らない。

(Reichardt 1796d: 103ff.)」

どうやら12月末にシラーが『ドイツ』を入手してゲーテに送付した模様だ。

「いよいよライヒャルトは予想通りの行動を起こしました。彼は私をどうにかして、あなたが彼の友達であるかのようにあなたに思わせたいだけなのです。彼はこの分断作戦が上手くいくと思い込んでいるのですから、切り離すことなどできない繋がりによって大地にたたきつけることが必要だと思えます。あなた自身が見るように、彼の厚かましい攻撃を許すことなどできないなら、反撃は素早く、決定的なものでなければなりません。(㉗25. Dezember 1796, Schiller an Goethe)」

このようなライヒャルト側からの反撃について、後にゲーテは『覚え』(1797年の項)に「『クセーニエン』によってドイツ中が興奮し、誰もがののしると同時に笑いました。[クセーニエンに]傷ついた人々は不快を表そうとしましたが、我々の対抗策は疲れを知らない継続的な行動によりました。(Goethe 1830: 53)」と記している。

シラーは更に激しくライヒャルトを攻撃しようとするが、ゲーテはシラーから『ドイツ』の送付を受けた頃、年末旅行の直前で詳しく読んでいる時間が無かったようだ。そこでシラーに対し、先走った行動をしないようにと自制を求めている。

「早まらないでください。敵は時間をかけて反撃してきました。期限に縛られることなどなく、よく考えることによって得られるはずの優位さを、血気にはやって失わないようにしましょう。問題が散文的に扱われてきただけに熟慮がなおさら必要であり、最初の言葉が最も重要な意味を持ちます。…[中略] …2種の雑誌の匿名の編集者[ライヒャルト]が、ある詩[クセーニエン]で中傷され、人間として攻撃されたとして、雑誌と年鑑の名だたる編集者[シラー]を攻撃しています。私の考えでは、この際、彼を快適な半匿名の状態から追い出し、ともかく敵を知ることができるように彼の雑誌に名前を記すことを頼まなければなりません[17]。(㉘27. Dezember 1796, Goethe an Schiller)」

もっともこの手紙は末尾が欠けているため、この後にさらにライヒャルトについての話題があった可能性がある。

帰宅してから冷静に判断したゲーテは、論争を巻き起こすという成果があったのだから、これ以上続けるべきではないと考えた。そしてシラーも、「あなたの忠告に喜んで従い、当分の間ライヒャルトの件は考えないことにしました。(㉙11. Januar 1797, Schiller an Goethe)」と返信している。

どうやらこの頃からライヒャルトに対して同情する声が上がり始めたようで(滝藤2017: 47; Fischer-Dieskau 1992: 251)、たとえばジャン・パウルJean Paul(本名Jean Paul Friedrich Richter)(1763-1825)[18]は或る友人に宛てた手紙に「ゲーテの性格は恐ろしい。…[中略] …

17) ライヒャルトが『ドイツ』第4号に掲載した記事からもわかるように、ライヒャルト側は「匿名」にしていない。

18) ジャン・パウルは自らも「クセーニエン」の対象であり、たとえば「41. ジャン・パウル・リヒター:おまえは自分の富について、彼が貧しさに対して持っている尊敬の念の/半分だけでも持っているとすれば、おまえは私たちの賞賛に値する。」と書かれている(他に41, 42?, 276, (424-428)等が挙げられる)。

ゲーテが善良なライヒャルトのように親しい者を打ちのめすことができるとは、心がひどく痛む。(㉕Jean Paul, 22. Oktover 1796)」と記している。

6．和解

しかし、彼等が和解をするには更に時間がかかった。ようやく1801年になって、ゲーテが重い病に倒れたのを機に、ライヒャルトが見舞いの手紙を送り、ゲーテもそれに返信している。

［ライヒャルト］「あなたに少しでも喜んでいただけるのであれば、ポツダムとここ［ベルリン］で、幸せな最近の数ヶ月の間に、あなたの素晴らしい詩に私が作った歌曲を喜んでお送りします。私は今まで以上にあなたの心に寄り添いたいと思います。(㉝25. Januar 1801, Reichardt an Goethe)」

［ゲーテ］「あなたの手紙は、あなた自身がお書きになっているように心のこもったもので、私にとってどれほど嬉しいものだったでしょうか。私たちのような古くから築かれた関係は、血の友情のようなもので、不自然な出来事によってのみ妨げられます。自然と信念がそれを回復するとき、それはますます喜ばしくなります。…［中略］…私が病気の後、最初に感じた強い欲求は音楽に向かうものでしたので、状況が許す限りその欲求を最高に満たそうと思いました。あなたの最新の作曲を送って下さい。私と何人かの友人で、お祝いの夜会を行いたいと思います。(㉞5.Febr.1801, Goethe an Reichardt)」

こうして二人の関係はとりあえず修復され、翌02年にゲーテがギービヒェンシュタインにあるライヒャルトの家を訪問した時の様子が『覚え』(1802年の項)に書かれている。

「［1802年６月に］親切なライヒャルトへの訪問者がギービヒエンシュタインの近くに集まりました。…［中略］…また、ライヒャルトが私の詩に付けた旋律が、長女［ルイーゼLuise Reichardt (1779-1826)］のよく響く声によって感情豊に演奏されるのを聴いたことも忘れられません。(Goethe 1830: 97-98)」

しかしシラーについては、彼が早世したため和解の機会がなかったと滝藤は指摘している(滝藤2017: 51)。

Ⅲ　クセーニエン論争の影響

1．1795年までのゲーテ・シラーとの関係

【A．ゲーテ】

ライヒャルトによる最初のゲーテ歌曲(表２参照)は1780年に出版した《頌歌とリート、第２巻Oden und Lieder von Göthe, Bürger, Sprickmann, Voß und Thomsen, mit Melodien beym Klavier zu singen, von Johann Friedrich Reichardt. Zweyter Theil.》と翌81年の《頌歌とリート、第３巻Oden und Lieder von Herder, Göthe und andern, mit Melodien, beym Klavier zu singen, von Johann Friedrich Reichardt. Dritter Theil.》に掲載された

15曲に始まり、彼の創作活動初期からゲーテが重要な詩人であったことがわかる。

その後、ゲーテの戯曲《ヴィラ・ベッラのクラウディーネClaudine von Villa Bella》(1789年)と《リラLilla》(1791年)を用いてジングシュピールを作曲している。

さらに、『音楽芸術雑誌Musikalische Kunstmagazin』第2巻に出された予告によると(Reichatdt 1791)《民謡調のリートと高尚な歌曲Lieder im Volkton und höhere Gesänge》、3曲のジングシュピール《エルヴィンとエルミーレErwin und Elmire》、《ヴィラ・ベッラのクラウディーネ》、《リラ》、さらに《ゲーテの悲劇》、《ゲーテの戯曲》という配列による《ゲーテ音楽作品集Musik zu Göthe's Werken》(全6巻)を企画している。もっとも、実際に出版されたのはいずれもジングシュピールのヴォーカルスコアである《エルヴィンとエルミーレ》(1790年)と《ジェリーとベテリーJery und Bätely》(1791年)、そして《ゲーテ叙情詩集Goethes lyrische Gedichte》(1794年)の3巻に留まった。

また、1795年から96年にかけて、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』への付録提供も行っている。

このように、1794年まではライヒャルトがゲーテの最も信頼の置ける「第一作曲家」であったことは明らかである。

【B. シラー】

ライヒャルトによる最初のシラー歌曲(表3参照)は『詩神年鑑1796』への提供楽譜に含まれる〈歌の力Die Macht des Gesanges〉と〈女性の尊厳Würde der Frauen〉であり[19]、その交渉の経緯は1795年の書簡(④8月3日、⑤同28日)から読み取れる。

シラーとライヒャルトの直接的共同作業の期間は短かったが、互いに信頼し合っていたことはゲーテの詩による〈恋人の近く〉(『詩神年鑑1796』に掲載)に関して、歌詞の変更提案をゲーテに仲介してほしいと依頼する7月20日付け書簡が残っていることからもわかる[20]。

2. 企画の中断

先にも述べたように、《ゲーテ音楽作品集》の企画は予定していた6巻中3巻だけで終わって

---

19) 残念なことにhttps://books.google.com.naのデータでは、5頁の〈歌の力〉以外は楽譜頁が欠落している。

20) 手紙には「〈恋人の近く〉を美しい言葉と完全に調和するように作曲してみると、前の節と同様に第3節でも、[言葉の]切れ目が〈森Hain〉の後にあると良いと思います。このように[daを]追加して[-eを]取り去れば良くなるとゲーテに提案して下さい。(③Salmenn 1970: 99 =EDM59)」とある。問題の行はゲーテに従えばIm stillen Haine geh ich oft zu lauschenとなるが、他の節ではすべて、ヤンブスの第2詩脚の後に意味上の切れ目が存在する。そこでライヒャルトは第3節にも他と同じ旋律が付けられるように、'Haine'末尾の弱い[-e]を省略して、代わりにコンマと〈そこda〉を挿入し、Im stillen Hain, da geh ich oft zu lauschenに変える提案をしたわけである。ライヒャルト自身がゲーテに提案しても良かったはずだが、この曲の作曲はシラーからの依頼だったため、シラー経由としたのであろう。あるいは、ゲーテとの仲が微妙な状態だったのでシラーに依頼したのかも知れない。
なお、この詩はフリーデリケ・ブルンFriederike Brun(1765-1835)の詩にツェルターが作曲した〈私はあなたを思うIch denke dein〉の旋律にゲーテが感激して替え歌として作ったものなので、本来ならばツェルターの旋律に合わせて歌われるはずのものであった。ゲーテの〈私はあなたを思う〉への言及は書簡⑰に見られる。ツェルターの原曲はライヒャルトが編集した《音楽の花束Musikalische Blumenstrauß 1795》に掲載された。

しまったし、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』への付録提供も９曲中７曲という中途半端な物となった。

そこで、ライヒャルトが〈ミニョンの最後の歌〉を『ドイツ』第９号に掲載したのに対し、ゲーテは〈ミニョンの最後の歌〉の作曲をツェルターに依頼し、それは〈天使の仮装をするミニョン〉という題名で『詩神年鑑1797』に掲載された。

シラーも『詩神年鑑1796』ではライヒャルトに依頼した楽譜の提供を、97年版、98年版ではツェルターに変更している。

つまり論争がライヒャルトの活動に影響を与えたことは確かだといえる。

３．ライヒャルトによる論争終結以前の創作・出版

しかし、ライヒャルトは論争中、和解以前にもゲーテやシラーの詩に作曲を続け、しかも、あたかも論争など存在していないかのように、それらを出版している（表２・３参照）。

『ドイツ』に掲載された〈ミニョンの最後の歌〉はゲーテへの当てつけかも知れないが、《愛と孤独の歌曲集Ⅰ Lieder der Liebe und der Einsamkeit Ⅰ》（1798年）にはゲーテ歌曲８曲とシラー歌曲１曲が、《ドイツの良き母親のための子守歌 Wiegenlieder für gute deutsche Mütter》（1798年）にはシラー歌曲２曲が掲載され、1798年には既に論争が下火になっていたとはいえ、和解以前にゲーテ・シラーによる歌曲を積極的に出版している。

４．和解後の作品

和解後、ライヒャルトとゲーテの関係が元に戻ったわけではないが、彼は再び熱心な作曲活動を開始し、1809年と11年にそれまでに作ったゲーテ歌曲をほぼ全て集め、更に何曲かの新作を足して《ゲーテ歌曲集Ⅰ－Ⅳ Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen Ⅰ-Ⅳ》を出版している。

一方、シラーの場合は詩人が1805年に他界してしまったため、ゲーテとは違って直接的な和解の証拠は見当たらないが、1810年に未亡人シャーロット・フォン・シラー Charlotte von Schiller（1766-1826）に対して《シラー叙情詩集Ⅰ・Ⅱ Schillers lyrische Gedichte Ⅰ・Ⅱ》を出版したいという意向を伝え、新作のために詩の提供を願う手紙を書いている。

> 「つい最近出版されたゲーテ歌曲集と同様にあなたの不滅のご主人が作られた歌にふさわしい詩に私が作った数々の作品を出版したいと考えておりますので、高貴な方よ、お訊ねすることをお許し下さい。あなた様、あるいはあなた様の高貴な姉妹のお手元には不滅の方が作られた音楽を付けることがふさわしいかも知れない未知の詩がまだいくつかあるのではないでしょうか。そして、できる限り豊かで完全な新しい歌曲集を喜んで作ることを私にお許しになるという、ご厚意をお持ちではないでしょうか。あなた様が命じて下されば、そのご意志にお答えする準備があります。あなた様のご意志と命令を最も忠実に達成することを通して尊敬をお示しする所存にございます。あなたの最も

献身的で従順な僕、ライヒャルト。（㉟4. Januar 1810, Reichardt an Charlotte von Schiller)」

そしてこの計画はすぐに実現している。

こうやって見ると、ゲーテについても、シラーにいても、むしろ論争以降の方が活発な創作・出版活動をしているといえるのではないだろうか。特に1810年前後の活動には注目すべきであり、《ゲーテ歌曲集》の場合、新作の割合は第Ⅰ巻が19／56、第Ⅱ巻が12／47、第Ⅲ巻が3／11、そして第Ⅳ巻が13／14となっており（全体では47／128)、《シラー抒情詩集》に到っては第Ⅰ巻が23／31、第Ⅱ巻が19／19であり、新作が遥かに多くなっている。

結　－「クセーニエン論争」はどんな意味を持っていたか？－

95年から96年にかけて、ライヒャルトの音楽活動に滞りがあったことは事実である。《ゲーテ音楽作品集》と『修業時代』が中途半端なものとなったしまったことは、返す返すも残念である。しかし、これを「クセーニエン論争」の影響とするのは、時間軸を混乱させることになり、性急な結論であった[21)]。しかも、ライヒャルトが当初から「クセーニエン論争」の標的ではなかったということも、改めて確認しておくべきであろう。

本稿では様々な出来事を場合によって順番を入れ替えて記述しなければならない箇所もあったので、ここで、時間軸に沿って整理しておきたい（表1クセーニエン論争年表参照)。

①(1794-)　そもそもの原因はライヒャルトの政治的な姿勢と発言にあった。

②(1794)　それにゲーテとシラーが不信を懐いた。

③(1794-95)　その結果、《ゲーテ音楽作品集》及び『修業時代』が中断した。

ここまでが「クセーニエン論争」前段である。この間にも、『修業時代』付録楽譜の代金支払いに関してゲーテとライヒャルトとの間で手紙が遣り取りされ、シラーも『詩神年鑑1796』への楽譜掲載を依頼した。そしてライヒャルトはゲーテへの仲介をシラーに依頼している。既に「中断」という重大な出来事があったのは確かだが、まだ深刻ではなかったのだろう。

④（1795末）ゲーテが「クセーニエン」を発想し、シラーも賛同した。

⑤(1796)　ライヒャルトが『会話集』批判を『ドイツ』に掲載した。

⑥(1796)　「クセーニエン」の標的にライヒャルトが追加され、ライヒャルトも反撃した。

厳密な意味での「クセーニエン論争」である。今度も楽譜を巡る争いが発生し、『詩神年鑑』に付録楽譜を掲載する依頼相手がライヒャルトからツェルターに変更された。

⑦論争下であっても、ライヒャルトは積極的にゲーテ歌曲、シラー歌曲を作曲し、出版した。

⑧(1801)　ゲーテと和解した（シラーとは和解する機会が得られなかった)。

⑨和解後、さらに積極的なゲーテ歌曲・シラー歌曲の作曲・出版が続いた。

---

21) 拙稿「シューベルト《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》の構想」『東京音楽大学研究紀要』2021年、第45集23-43.の記述を訂正したい。

上記のように停滞が生じたことは確かだ。《ゲーテ音楽作品集》、『修業時代』、『詩神年鑑』という場を失ったことはライヒャルトにとって大きな痛手であったろうし、「ゲーテの第一作曲家」の地位を取り戻すこともできなかった。従来、この停滞は「障害」としての面が強調されてきた。

しかし論争中、あるいは論争直後の和解前であっても、ライヒャルトはゲーテとシラーによる詩を積極的に採り上げて作曲し、出版している。しかも、彼の創作活動はゲーテとの和解後（シラーは既に故人となっていた）に一層活発化しており、ゲーテ歌曲についてもシラー歌曲についても、現在残されている過半数が「論争」以降に作られている（表２・３参照）。

つまり、広い意味の「クセーニエン論争」がライヒャルトの音楽活動に負の影響を与えたのは確かだとしても、それだけではなく、むしろ創作に新たなエネルギーを与える源となったとさえ考えることができる。ライヒャルトにとって、ゲーテとシラーの詩には「これに作曲したい」と思わせる魅力が溢れていたということであろう。

（本学教授＝音楽学／音楽教育学担当）

表1　クセーニエン論争年表

凡例：　①～㉟書簡　発信者⇒受信者　G.=Goethe　R.=Reichardt　S.=Schiller　U.=Unger　Z.=Zelter

1794	Nov.？	ゲーテ『会話集』原稿完成
	29.Nov.	① S.⇒ G.　『ホーラたち』への『会話集』掲載に懸念
	Dez./Jan.95	『ホーラたち』1.Bd., 1.St., S.49-78『会話集』１掲載
1795	Jan./Febr.	『ホーラたち』1.Bd., 2.St., S.1-28『会話集』２掲載
	März/April	『ホーラたち』2.Bd., 4.St., S.41-67『会話集』３掲載
	8.Mai	② G.⇒ U.　『修業時代』第２巻出版
	Juni/Juli	『修業時代』第３巻出版（３曲中２曲）
	Juni/Juli	『ホーラたち』3.Bd., 7.St., S.50-76『会話集』４掲載
	20. Juli	③ R.⇒ S.　ゲーテへの仲介依頼
	3.Aug.	④ S.⇒ R.　『詩神年鑑 96』への楽譜掲載依頼 『フランス』における政治的発言に苦言
	28.Aug.	⑤ S.⇒ R.　『詩神年鑑 96』出版最終打ち合わせ
	Aug./Sept.	『ホーラたち』3.Bd., 9.St., S.45-52『会話集』５掲載
	Sept./Okt.	『詩神年鑑 96』出版
	Sept./Okt.	『ホーラたち』4.Bd., 10.St., S.108-152『会話集』６『寓話』掲載
	5.Dez.	⑥ R.⇒ G.　『修業時代』の楽譜代金 16 Ducaten
	21.Dez.	⑦ G.⇒ R.　『修業時代』の楽譜代金
	23.Dez.	⑧ G.⇒ S.　Xenien の着想
	29.Dez.	⑨ S.⇒ G.　賛同（対象候補にライヒャルトの名前はない）
	30.Dez.	⑩ G.⇒ S.　追加説明
1796	Jan.	『ドイツ』1.Bd., 1.St. S.58ff.『ホーラたち』批評『会話集』酷評
	27.Jan.	⑪ S.⇒ G.　ライヒャルトの書評に言及
	30.Jan.	⑫ G.⇒ S.　書評を確認した
	31.Jan.	⑬ G.⇒ S.　書評の感想
	4.Febr.	⑭ G.⇒ S.　最初の Xenien 送付（対ライヒャルトは含まず）
	5.Febr.	⑮ S.⇒ G.　ライヒャルトへの不信
	März	『ドイツ』1.Bd., 3.St., S.377『寓話』絶賛
	7.März	⑯ G.⇒ U.　『修業時代』第４巻出版準備
	Juni	『ドイツ』2.Bd., 6.St. S.348ff. 'An den Herausgeber Deutschlands'（Fr.Schlegel）
	13.Juni	⑰ G.⇒ U.　ツェルターに言及'Ich denke dein'
	22.Juni	⑱ G.⇒ S.　ツェルターに言及'Mignons letzter Gesang'
	1.Aug.	⑲ S.⇒ G.　Xenien 誕生の思い出
	8.Aug.	⑳ S.⇒ Z.　『詩神年鑑 97』への楽譜掲載依頼
	18.Aug.	㉑ S.⇒ Z.　『詩神年鑑 97』への楽譜掲載打ち合わせ
	Aug./Sept.	『修業時代』第４巻出版（１曲中０曲／『ドイツ』６～８の広告あり）
	Sept.	『ドイツ』3.Bd., 9.St., S.347（ライヒャルト'Mignons letzter Gesang'掲載）
	4.Sept.	㉒ S.⇒ Z.　『詩神年鑑 97』への楽譜掲載打ち合わせ
	7.Okt.	ツェルター付録楽譜をシラーに送付
	10.Okt.	㉓ S.⇒ Z.　『詩神年鑑 97』完成
	Okt.	『詩神年鑑 97』出版（ツェルター'Mignon als Engel verkleidet'掲載）
	Okt.	『ドイツ』4.Bd., 10.St., S.83『詩神年鑑 97』書評 『ドイツ』4.Bd., 10.St., S.103 "Erklärung des Herausgebers an das Publikum"
	16. Okt.	㉔ S.⇒ Z.　『詩神年鑑 97』付録楽譜受け取り感謝
	22. Okt.	㉕ Jean Paul ⇒ an einen Freund　ライヒャルトを擁護
	23.Okt.	㉖ S.⇒ G.　反響を気にする
	25.Dez.	㉗ S.⇒ G.　ライヒャルトの反撃を知らせる
	27.Dez.	㉘ G.⇒ S.　シラーに自制を求める
1797	11.Jan.	㉙ S.⇒ G.　論争の終息
	6.Juli	㉚ S.⇒ Z.　『詩神年鑑 98』への楽譜掲載依頼
	7.Aug.	㉛ S.⇒ Z.　『詩神年鑑 98』への楽譜掲載打ち合わせ
	20.Okt.	㉜ S.⇒ Z.　『詩神年鑑 98』への楽譜掲載打ち合わせ
1801	25. Jan.	㉝ R.⇒ G.　病気見舞い
	5.Febr.	㉞ G.⇒ R.　感謝
1802	Juni	ゲーテ、ギービヒェンシュタイン訪問（『覚え』）
1810	4.Jan.	㉟ R.⇒ S.(Charlotte)　歌詞提供／出版許可依頼

表2　ライヒャルトによるゲーテ歌曲一覧

各曲の番号は EDM58,　59 による

Oden und Lieder II (1780)	129. An *** 131. Aus Erwin und Elmire	130. Aus Erwin und Elmire 132. Aus Erwin und Elmire
Oden und Lieder III (1781)	21. An Belinden 54. Jägers Nachtlied 57. Christel 106. Der Fischer 134. Bundeslied 135b. Aus Claudine von Villa Bella	50. Mailied 55. Rettung 87. Feiger Gedanken (aus Lilla) 133. Im Sommer 135a. Aus Claudine von Villa Bella
Berlinische Monatsschrift (1783)	104. Das Veilchen	
Deutsche Gesänge (1788)	28. Wonne der Wehmut	76. An Lida
Cäcilia I -IV (1790-95)	48. An den Mond 73. Rhapsodie aus der Harzreise	52. Wandrers Nachtlied
Musikalisches Wochenblatt (1791)	140. Lied aus Erwin und Elmire	
Musikalische Blumenstrauß I (1792)	10. Heidenröslein	37. An die Entfernte
Musikalische Blumenstrauß II (1793)	33. Erster Verlust	77. Nähe
Göthe's lyrische Gedichte (1794)	4. Wechsellied zum Tanze 17. Neue Liebe, neues Leben 26. Bundeslied 41. Sorge 47. Künstleers Abendlied 64. Erkanntes Glück 69. Einsamkeit 71. Süße Sorgen 105. Erlkönig	11. Der Abschied 20. Willkmmem und Abschied 31. Geistes-Gruß 43. Vom Berge 51. Mit einem gemalten Bande 67. Rastlose Liebe 70. Auf dem See 75. Ganymed
Wilhelm Meister (1795-96)	93. Der Sänger 95. Klage 97. Die Nacht 100. Sehnsucht	94. Italien 96. Einsamkeit 98. Das Geheimnis
Schillers Musen-Almanach (1796)	60. Koptisches Lied 66. Glückliche Fahrt	65. Meeres Stille 136. Nähe des Geliebten
Musikalischer Almanach (1796)	141. Der Federschmuck	
Deutschland (1796)	49. Einschränkung	99. Mignons letzter Gesang
Lieder der Liebe und der Einsamkeit I (1798)	5. Das Mädchen 7. Der Schmachtende 44. An Mignon	6. Der Jungling 8. Der Jäger
(Einzeldruck, 1798)	127. Iphigenia	
Zeitung für eleganten Welt (1801-02)	91. Die Trommel gerühret!	89. Warum doch erschallen

Zeitung für gebildete, umbefangene Leser (1803)	2. Der Musensohn	23. Nähe des Geliebten
Musik zu Reichardt's Liederspielen (1804)	18. Neue Liebe, neues Leben 139. Aus Claudine (von Villa Bella)	27. Bundeslied
Lieder der Liebe und der Einsamkeit II (1805)	21a. An Belinden 62. An Lotte 137. Klage	59. An Lina 90. Freudvoll und leidvoll
Romantische Gesänge (1805)	40. Sehnsucht 109. Das Blümlein Wunderschön	84. Tiefer liegt die Nacht
Le Troubadour (1805-06)	1. Selbstbetrug 24. Frühzeitiger Frühling 38. Trost in Tränen 58. Frühluings-Orakel 80. Leere Zeiten der Jugend 86. Laß dich genießen, aus Proserpina 108. Der Edelknabe und die Müllerin 111. Der König von Thule 138. Mondschein. Szene aus Clandine von Vlla Bella	22. Schäfers Klage 25. Abschied 39. Nachtgesang 79. Einziger Augenblick 81. Bilder der Hoffnung 92. Sehnsucht 110. Der umtreue Knabe 112. Der Junggesell und der Mühlbach
(Einzeldruck, 1808)	68. Rastlose Liebe	
Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen I (1809)	3. Der neue Amadis 12. Weltseele 14. An die Erwählte 16. Erinnerung 29. Dauer im Wechsel 32. Zum neuen Jahr 35. Die glücklichen Gatten 42. Anliegen 46. Künstlers Morgenlied 56. Vanitas! vanitatum vanitas	9. Wechsel 13. Nachtgefühl 15. Die schöne Nacht 19. Am Flusse 30. Tischlied 34. Wer kauft Liebesgötter 36. Die glücklichen Gatten 45. An Mignon 53. Wandrers Nachtlied
Goethe Lieder, Oden, Balladen und Romanzen II (1809)	61. Mut 72. Prometheus 78. Herzog Leopold von Braunschweig 83. Felsen stehen gegründet 88. Wir helfen gerne 102. Philomele	63. Herbstgefühl 74. Gott 82. Nun ihr Musen, genug! 85. Lied der Parzen, aus Iphigenia 101. Letztes Lied des Harfenspielers 103. Warnung
Goethe Lieder, Oden, Balladen und Romanzen III (1809)	107. Die Spinnerin 114. Der Müllerin Reue	113. Der Müllerin Verrat
Goethe Lieder, Oden, Balladen und Romanzen IV (1811)	115. Der Strauß 117. Hochzeitlied 119. Der Schatzräber 121. Bergschloß 123. Vierstimmiger Kanon 125. Vierstimmiger Kanon 128. Monolog des Tasso	116. Das Wiedersehn 118. Ritter Curts Brautfahrt 120. Rechenschaft 122. Schneiderscheck 124. Dreistimmiger Kanon 126. Johanna Sebus
Allgemeine Musikalische Zeitung XIII (1811)	142. Schweizervolkslied	

表3　ライヒャルトによるシラー歌曲一覧

各曲の番号は EDM125 による

Schillers Musen-Almanach (1796)	13. Würde der Frauen 55. Die Macht des Gesanges	20. Die Macht des Gesanges
(Reichardts) Musikalischer Almanach (1796)	25. An die Freude	
Wiegenlieder für gute deutsche Mutter (1798)	57. Hoffnung	58. Das Kind in der Wiege
Lieder der Liebe und Einsamkeit I (1798)	3. Die Ideale	51. Die Ideale
Lieder für die Jugend II (1799)	15. An den Frühling	54. An den Frühling
Lieder der Liebe und Einsamkeit II (1804)	7. Des Mädchens Klage	52. Des Mädchens Klage
Neue Lieder geselliger Freude II (1804)	21. Punschlied. Chorgesang	56. Das Punschlied
Studien (1808)	11. Thekla.Eine Geisterstimme	53. Thekla.Eine Geisterstimme
Schiller's lyrische Gedichte I (1810)	1. Das Mädchen aus der Fremde 4. Die Ideale. Neue Melodie 6. Das Eleusinische Fest 9. Die Begegmung 12. Das Geheimniss der Reminiszenz. An Laura 14. An den Frühling 17. Sehnsucht 19. Hektors Ahschied 23. Männerwürde 26. An die Freude, Neue Melodie 28. Monolog der Thekla. In den Piccolominis 29. Monolog der Thekla. Aus Wallenstein's Tod 30. Monolog der Johanna 31. Monolog der Johanna. Componirt für M.M. in Danzig. 1807	2. Das Geheimnis 5. Die Ideale. Chorgesang 8. Die Blumen 10. Die Erwartung 16. An Emma 18. Aechtes Glück 22. Die vier Weltalter 24. Das Unwandelbare 27. Die Gunst des Augenhlicks
Schiller's lyrische Gedichte II (1811)	32. Der Jüngling am Bache 34. Die Entztüikkung an Laura 36. Berglied 38. Ritter Toggenburg 40. Die Worte des Glaubens 42. Hoffnung 44. An die Freunde 46. Das Mädchen von Orleans 48. Aeneas zu Dido 50. Amalia	33. Der Alpenjäger 35. Fantasie an Laura 37. Der Pilgrim 39. Licht und Warme 41. Die Worte des Wahns 43. Ditthyrambe 45. Punschlied. Im Norden zu singen 47. Der Graf von Habsburg 49. Erster Monolog der Johanna

参考文献

一次資料

Goethe, Johann Wolfgang von:

1795: Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten, in Die Horen 1795, 1.Bd., 1.St., S.49-78; 1.Bd., 2.St., S.1-28; 2.Bd., 4.St., S.41-67; 3.Bd., 7.St., S.50-76; 3.Bd., 9.St., S.45-52; 4.Bd., 10.St., S.108-152 (https://www.friedrich-schiller-archiv.de; http://ds.ub.uni-bielefeld.de).

1795/96: Wilhelm Meisters Lehrjahre, Berlin: Johann Friedrich Unger (ND: Insel Taschenbuch 475, 1980).

1801: Brief An Johann Friedrich Reichardt, (http://www.zeno.org/Literatur/M/Goethe). ⑥、㉞

1830: Tag- und Jahreshefte (http://www.zeno.org/Literatur/M/Goethe).

o.J.: Briefe (http://www.zeno.org).②、⑯、⑰

Goethe, Johann Wolfgang von: + Schiller, Friedrich von:

1796: Xenien, in Musenalmanach für das Jahr 1797, S.197-302 (Digitale Sammlungen der Herzogin Anna Amalia Bibliothek = https://haab-digital.klassik-stiftung.de).

o.J.: Briefwechsel Schiller-Goethe (Friedrich Schiller Archiv).①、⑧～⑮、⑱、⑲、㉖～㉙

Hecker Max (hrsg.):

1925: Die Briefe Johann Friedrich Reichardts an Goethe, Jahrbuch der Goethe-Gesellschaft / Zeitschriftenband, S.197-252, (http://www.digizeitschriften.de). ⑦、㉝

Jean Paul:

o.J.: Sämtliche Briefe digital (https://www.jeanpaul-edition.de).㉕

Reichardt, Johann Friedrich:

1780: Oden und Lieder von Göthe, Bürger, Sprickmann, Voß und Thomsen, Zweyter Theil, Berlin: Pauli.

1781: Oden und Lieder von Herder, Göthe und andern, Dritter Theil, Berlin: Pauli.

1790: Erwin und Elmire, Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung, (IMSLP350333-PMLP565954).

1791a: Jery und Bätely, Berlin: Reichardt, (IMSLP162980-PMLP292087).

1791b: Fortgesetztes chronologisches Verzeichnis der öffentlich im Druck und Kupferstich erschienenen musikalische Werke von Johann Friedrich Reichardt, in Musikalisches Kunstmagazin Ⅱ, S.124-126.

1794: Goethes lyrische Gedichte, Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung, (IMSLP591942-PMLP126396).

1794/96: Briefe eines aufmerksamen Reisenden die Musik betreffend, Frankfurt u. Leipzig.

1795a: Frankreich, (https://catalog.hathitrust.org).

1795b: Brief an Fr.v.Schiller (Salmenn 1970: 99 =EDM59).③

1796a: Deutschland, Berlin: Unger, (https://catalog.hathitrust.org).

1796b: Notiz von deutschen Journalen, in Deutschland, 1.Bd. 1.St. S.55ff.; 3.St. S.373ff.

1796c: Neue deutsche Werke. Musenalmanach für das Jahr 1797. Herausgegeben von Schiller, in Deutschland, 4.Bd. 10.St. S.83ff.

1796d: Erklärung des Herausgebers an das Publikum, über die Xenien im Schillerschen Musenalmanach. 1797, in Deutschland, 4.Bd. 10.St. S.103.

1796e: Liedergeselliger Freude Ⅰ, Leipzig: Fleischer.
1797: An die Freunde der edlen Musik, in Lyceum der schönen Künste Ⅱ, S.187-192, (https://catalog.hathitrust.org)
1798a: Lieder der Liebe und der Einsamkeit Ⅰ, Leipzig: Fleischer.
1798b: Wiegenlieder für gute deutsche Mütter, Leipzig: Fleischer.
1799a: Lieder für die Jugend Ⅱ, Leipzig: Fleischer.
1809/11: Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen Ⅰ-Ⅳ, Leipzig: Breitkopf & Härtel (EDM58-59).
1810: Brief an C.v.Schiller (Goethe-Schiller-Archiv).㉟
1810: Schillers lyrische Gedichte Ⅰ・Ⅱ, Leipzig: Breitkopf & Härtel (EDM125).

Schiller, Friedrich von:
1795a: Vorwort, in Die Horen, 1.Bd., 1.St., S.49-78, (http://ds.ub.uni-bielefeld.de).
1795b: Musanalmanach 1796, (https://books.google.com.).
1796: Musanalmanach 1797, (https://books.google.com.).
o.J.: Briefe (Goethe-Schiller-Archiv). ④、⑤、⑳～㉔、㉚～㉜

Schlegel, Friedrich:
1796: An den Herausgeber Deutschlands, Schillers Musen Almanach betreffend, in Deutschland, St.6. S.348

二次資料

Beetz, Manfred:
2003 Vergiftete Gastgeschenke. Zum Xenienkrieg der Weimarer Dioskuren gegen Reichardt, in Johann Friedrich Reichardt. Zwischen Anpassung und Provokation Goethes Lieder und Singspielen in Reichardts Vertonung (hrsg.v.W.Ruf), Halle: Händel-Haus, 2003, 83-104.

Boas, Eduard:
1851 Schiller und Goethe im Xenienkampf, Stuttgart, J.G. Cotta. (https://books.google.com)

Fischer-Dieskau, Dietrich:
1992 Weil nicht alle Blütenträume reiften -Johann Friedrich Reichardt Hofkapellmeister dreier Preußenkönige, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt GmbH.

Gstrein, Rainer:
1992 Schiller und Reichardt, in Musik des Ostens: Ostmittel-, Ost- und Südosteuropa. XII, Kassel: Bärenreiter, 273-282.

Gstrein, Rainer + Meier, Andreas:
2005: Schillers lyrische Gedichte mit Musik von Johann Friedrich Reichadt, EDM125, München: G.Henle Verlag.

国松　孝二他編
1998 『独和大辞典（第二版）』東京：小学館（Xenie: 2727）.

松村　朋彦
2003 「越境する文学　ゲーテにおける『移住』のモティーフ」『ドイツ文学Neue Beiträge zur Germanistik』1,2 (110), 83-96.

Michel, Christoph:
2002 'Baalspfaffe'—'Wächter Zions'—'demokratischer Spitz'—'Skorpion': Zur Xenien-Polemik Schillers und Goethes gegen Johann Friedrich Reichardt, in "...von der

musikalischen Seite unser Freund, von der politischen unser Widersacher...": Der Tonkünstler Johann Friedrich Reichardt und Goethe, (hrsg.v. Hansen), Düsseldorf: Goethe-Museum, 43-46.

村田　千尋

2016　「J.F.ライヒャルトのリート研究：その１　出版楽譜の概要」『東京音楽大学研究紀要』第40集1-27.

2021　「シューベルト《ヴィルヘルム・マイスター歌曲集》の構想」『東京音楽大学研究紀要』第45集23-43.

Plachta, Bodo:

2003　'...da er uns auf unserem legitimen Boden den Krieg machte': Schillers 'Guerre ouverte' gegen Johann Friedrich Reichardt, in Johann Friedrich Reichardt und die Literatur: Komponieren, Korrespondieren, Publizieren. Hildesheim: Georg Olms, 360—380.

Salmen, Walter:

1963　Johann Friedrich Reichardt. Komponist Schriftsteller Kapellmeister und Verwaltungsbeamter der Goethezeit, Freiburg i.Br.:Atlantis.

1964/70:　Johann Friedrich Reichardt, EDM58/59, München: G.Henle Verlag.

2002　'...von der musikalischen Seite unser Freund, von der politischen unser Widersacher...': Der Tonkünstler Johann Friedrich Reichardt und Goethe in "...von der musikalischen Seite unser Freund, von der politischen unser Widersacher...": Der Tonkünstler Johann Friedrich Reichardt und Goethe, (hrsg.v. Hansen), Düsseldorf: Goethe-Museum, 24–35.

Saupe, Ernst Julius:

1852　Schiller-Goethe'schen Xenien, Leipzig: Verlagsbuchhandlung von J.J.Weber https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.hny4y8&view=1up&seq=5&skin=2021

滝藤　早苗

2017　『ライヒャルト　ゲーテ時代の指導的音楽家』東京：慶應義塾大学出版会

Wittmann, Gertraud

1936　"Das klavierbegleitete Sololied Karl Friedrich Zelters" Diss. Ludwig=Universität Gießen.

（電子データ最終参照日2022年８月28日）